

357 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 17:56:57.61 ID:zWdvc1hD0

真夏。

家の中にいても炎天下に晒されているような憎い湿度。

蝉も揃って大合唱。

風鈴がカリンカリンと事も無さげにその音を響かせる。

俺「あっちー……………」

ジリリリリリ……………」

蝉が鳴る。

「くそっ…最近、増して気温が上がってきてないか？」

グダァーっと、だるそうに腕を伸ばす。

ポンと扇風機のスイッチを「強」に切り替える。

ブoooooooooooo……………」

「……………ふう」

哀愁の目で扇風機を見つめる。

358 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 17:57:35.13 ID:zWdvc1hD0

ついこの間買ったばかりの扇風機。

この夏はこれ一本で乗り切ろうかとしたが…

もうだめば。

心は完全にクーラーへと奪われた。

「…もう扇風機だけじゃ駄目かも知れんね。そろそろクーラーに浮気しようかな。電気代かかるけど……………」

・
・
・

そして夜。

「今宵限りで君とはオサラバだ」

扇風機にそう語りかけ、扇風機を「中」に設定した。

角度調節。上下22度修正。よし。

布団の中にズルリと潜り込み、寂しそうに鳴らす扇風機の羽音を聞きながら俺は深い眠りへとついた……………」

・
・
・

359 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 17:58:29.28 ID:zWdvc1hD0

深夜。

「…うっ…うん…んくっ…
うがっ！！！」

自身のデカイイビキで思わず起きてしまった。
何て酷いイビキだ。
我ながら、ちょっと鬱になる。

時計をチラリと見る。
2:30。いい時間だ。

「マスター、涼しいですか？」

「あ…あ。涼しいよ…だがちょっと涼しすぎるかな…」

「でわ、「小」に切り替えておきますね」

「いや、俺が押すからいいよ…」

近くから声が聞こえた。
俺は誰と話しているんだ？ そんな当たり前のような疑問も
寝ぼけているせいか、思い浮かばない…
俺は淡々とその少女と話し続ける。

360 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 17:59:05.80 ID:zWdvc1hD0

「マスター、私が自動で切り替えておきますから結構です」

「いんや、俺が押さなきゃ誰が押すんだ」

「だから私が…って、ひゃあうう！？」

プニ。
プニプニ。

何だこの触り心地は。

「マ、マスタァ…そ、そこは駄目ですよお…ひゃあん！？」

ムニユ。
ムニユムニユ。

「らめえ…」

プニ？ムニユ？
…それに誰だ。「らめえ」とか言ってる子は、
次第に目が覚めてくると同時に疑問がポツポツと沸いてくる。
俺は一人暮らしのはずだが…おかしいな…

俺はガバッと起きて、電気を付けた。

361 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 17:59:38.19 ID:zWdvc1hD0

「！」

そこには頭に小さな扇風機を乗つけた着物姿の美少女が座っていた。

顔は赤面し、ポオっとしている。

俺「えーっと…君は何者だ？」

扇「マスタァ…」

あっ、ええと…私です。買っていたいた扇風機です」

俺「へ？…君は何を言ってんだ」

扇「ほ、ほら、じゃあこの扇風機見てください」

頭にチョコンと乗ったミニ扇風機を指差す。
よく見ると俺が買った扇風機(ミニサイズになってる)じゃないか。
これが証拠とでも言いたいのか。

俺「…」

俺は興味本位で引っ張ってみる。

扇「い、いたぁい！痛いですよぉ！…マスタァ」

頭皮にくっついてんのか、コレ。
改めて彼女を見る。
グスンと涙目で、頭に乘ったミニチュアをさすっている。
よほど痛かったのだろう。

362 名前：586 OMBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 18:00:22.61 ID:zWdvc1hD0

扇「私の体の一部なんですから、乱暴は止めてくださいよぉ」

俺「分かった分かった、今理解したよ」

扇「グスン…」

よしよしと頭をなでる。

扇「グスン…ふぁ？」

ナデナデ。

俺「さっきは悪かった。ごめんな」

そう言いながら、慰めるように優しくなでた。

扇「…マスタァの手、おっきいですねえ…」

扇「…エヘヘッ…温かいです…」

俺「ん？暑いかな」

扇「えっいや、そうじゃなくて…」

扇「マスタァの優しさで、心が温かいです…」

俺「そ、そうか…」

363 名前：586 OMBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 18:00:53.21 ID:zWdvc1hD0

しばらく撫でていた。

俺「な、なあ」

扇「はい？何でしょう、マスター」

俺「君は何で人間の体になっているんだ？」

扇「ええとですね・・・」

ちょっと話しますよお？

私、買って頂いてからずっとマスターに使われてきました。ただ最近、マスターがクーラーに心惹かれている姿を見て、ちょっと嫌な感じがしたんです。

俺「嫉妬したのか？」

扇「ち、違うですよお！」

も、もう、話しを元に戻しますよ？

だから、ちょっとマスターに私の実力をしってもらおうかななんて思ったり、大事にしてもらいたいななんて思ったりして、神様に祈った訳です。そうしたら、人間の体になっていたんです。

俺「大事にしてもらいたい・・・か」

扇「そうですよお。他の家電製品もみんな思ってると思いますよお？」

俺「なんか俄かに信じがたい話だな・・・」

364 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 18:01:55.90 ID:zWdvc1hD0

俺「でもまあ目の前にいる訳で」

扇「えへん」

胸を張り出し、自慢そうに格好つけてみせた。
こいつ、何かかわいいな。

俺「・・・でもお前・・・胸無いな」

扇「し、失礼なっ！」

俺「ペチャパイだ」

扇「こ、これは空気抵抗を減らすためであって機能性を重視した結果で・・・」

俺「はいはい、分かりましたよ」

扇「もう、マスタアは！」

俺「だがそんなお前がかわいい」

扇「ふええ！？」

ポッと顔を赤らめ、恥ずかしそうにギュッと縮まる。

扇「マスターは嘘も達者なんですね」

俺「まさか、本当だぞ？」

扇「もう・・・しりませんよっ？・・・全くマスタアは・・・」

俺に対して怒っているような顔を見せるが、照れを隠しているのが丸見えだ。
単純でかわいい奴。

365 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 18:02:35.57 ID:zWdvc1hD0

俺「それにしても・・・何だか暑くなってきたな」

扇「あっ、それなら私の冷風におまかせあれっ」

俺「どこがスイッチだ？」

扇「胸です」

俺「は？」

扇「だから、向かって左の胸が「小」、右の胸が「中」です」

俺「これはこれは」

俺はがしっと左胸を掴んでみた。

扇「ひゃああ！急に掴むなんて…ふあ…反則です」

俺「お、お前…感じているのか」

グニュグニュ。
モミモミ。

扇「ふああ…！べ、別に感じてなんか…ひゃん！」

366 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 18:03:33.16 ID:zWdvc1hD0

扇風子の頭に付いてる扇風機が回りだした。
風力からいって、「小」だ。

モミモミモミ。

俺「ふむ。これは便利な機能だ」

扇「ひゃあああ…駄目ですよお…そんなソフトなタッチで…」

俺「じゃあ「中」ではどうかな」

左胸から手を離し、右胸を勢い良く掴んでみた。

扇「ふあああ！！」

俺「なるほど、風力を高めれば高めるほど感じやすくなるんだな」

扇「だ、だからっ…感じてなんか…ふええ…な…ふあああ！」

俺「こりやおもしろい」

ぐにゅぐにゅ。
頭の扇風機は「中」で回っている。

367 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 18:04:12.22 ID:zWdvc1hD0

扇「ふあああん！…そんなぁ…駄目だよお…ひん！」

俺「じゃあ、二つ一気に揉んでみようか」

扇「そ、そんな！そんな事したら壊れちゃ…ひゃああああ！」

ぐにゅぐにゅモミモミ。
両手を使って敏感なところをまさぐる。

扇「ひゃあああ…そんなのお…らめえよお…ふああああ！！」

まるで生きた性感帯だ。
目はもう蕩けそうにトロンとダレている。

扇「ふああん…き、気持ちいいよお…らめえなのにい…！」

俺「機械の癖に淫乱なんだな」

扇「そんなこと…にやいよお…ふあああああ！」

俺「いや、変態だ」

扇「ふええああ…私はあ…感じてるのお…？」

368 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 18:04:54.55 ID:zWdvc1hD0

俺「これでもくらえっ」

ぐにっと両手で乳房をつまみあげる。

扇「ひゃああああ！らめえらめえ！…気持ちよすぎるよお…！」

扇「もっとお！もっとニギニギしてくださいいい」

俺はそっと手を離れた。

扇「な、なんでえ…？やめちゃらめえ…」

俺「お前には、確か"強"のボタンがあったな…」

扇「そ、それは…」

俺「どこだ？」

扇「恥ずかしくて…いえないですう…」

俺「続けて欲しくないのか？もっと気持ちよくなりたくないのか？」

扇「ううう…」

扇風子は、バサッと着物を下から上にめくりあげた。



(絵: [長目](#))

俺「ふ、ふんどし…」

旋風子のアソコからもう洪水のように愛液が漏れていた。
アソコに当たっているふんどしの部分に変色し、濡れ濡れになっていた。

扇「この…奥に…「強」のスイッチが…」

ただでさえ赤い顔が、カァァァーっと真っ赤に染まった。

もうこの子のアソコはトロトロだ。

俺「自分からおねだりしてみるんだ」

扇「えっ…そんな…」

俺「挿れて欲しいんだろ？正直になれよ」

扇「わ、…わたしは…」

扇「淫乱な子…です……」

扇「どうぞ…私のアソコにい…棒を差し込んで…」

扇「「強」のスイッチをお…入れて…くださいい…！」

俺「そこまで言えとは言ってないがな」

扇「！！」

俺「挿れて欲しいって言うだけでいいのに、まさか自分が淫乱だなんて告白するとはな…恐れ入ったよ…」

トロンとした上目遣いで訴えかけてくる。
もっと我慢できない…もう挿れてと…

俺「そんな淫乱な子にはお仕置きをしなきゃな」

彼女の体がビクビクと震えた。
"お仕置き"と聞いただけで、感じたみたいだ。

俺「そおらよ！！」

ズボズボ！

扇「ふああああ！！マスタァがあ、マスタァが中に来ましたあああ！！」

扇「もう、おかしくなっちゃうよお！気持ちよすぎて怖いよおお！！」

俺「そらそらっ」

俺は腰のスピードを早める。

扇「ひゃあん！激しすぎるっ…！で、でもっ気持ちいいいよおお！」

俺は挿入したまま彼女にキスをした。

扇「う、うぐっう……」

俺「…」

扇「ぷはぁ！！マスタァ！マスタァー！好きい大好きだよおお！！」

俺「ああ、俺もだ！」

俺は一層腰使いを早める。ラストスパートだ。

扇「好きっ好きっ大好きっ！！マスタァ好きいい！！！」

俺「ああ！」

扇「ふあああ！飛んじゃう！意識が飛んじゃいそうだよお！！ふああああ」

俺「いくぞ！今から出すぞっ」

382 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 19:56:00.05 ID:zWdvc1hD0

扇「きてえ！！マスターの、熱いのお！！出してえー！！！！」

俺「はああああ」

扇「ひくうっう！ひっちゃううううううう！！！」

ドピュッピュ

中に直接出した。白濁液がドロドロと漏れ出していく。

扇「ふあああああああああああ……」

俺「はあはあ……」

扇「マスターの熱いのお……中で……感じるよあ……」

俺はとっさにまた彼女の口を塞いだ。

扇「ふぐう……」

俺「…」

扇「ぷはぁ……マスタァ……好きい！……いつまでも……ずっと……！」

383 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 19:56:36.99 ID:zWdvc1hD0

ブチッ

そんな音が聞こえたかと思うと、扇風子の動きがピタリと止まった。

俺「あれっ………？」

よく見ると、コンセントが抜けていた。

抜けたコンセントを辿ると彼女のお尻へとつながっていた。

彼女はいかに人間の姿だからといっても、
やはり電気が必要だったらしい。

俺「くっ……」

またコンセントを繋ぐ。だが、動かない。
ショートでもしてしまったのかどうかは分からない。

俺は静かに、またコンセントを抜いた。
また復活してくれる事を祈りながら。

その時、その場で少し泣いた事は内緒だ。
俺は、そのまま、眠りに着いた。

・
・
・

384 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 19:58:26.14 ID:zWdvc1hD0

チンチン

俺「……………はっ！」

俺は目を覚ましたら、すぐさま彼女のいた所に視線を向けた。

だが……その場にあったのは……
人間でも何でもない、ただの扇風機がポツンと立っているだけだった。

俺「夢……だったのか……」

その場にパタリと崩れ落ちる俺。
泣いた。ぐしゃぐしゃになりながら、泣いた。

その時の俺は気づかなかった。

扇風機を回して寝たはずなのに
コンセントが抜けたままであることを

これは夏の終わりが近づいた、ある日の出来事。

「夏の終わり」 -fin-

385 名前：586 0MBCwWXAGc 投稿日：2006/08/20(日) 19:59:55.46 ID:zWdvc1hD0

おまけ

後日

「やあ、私は君の家にあるクーラーだ。
なかなか使ってくれなくて寂しかったよ。"おにーさん"」
「えっ!？」